

【10】 修得すべき知識能力

(2) 大学院

社会文化総合研究科

現代社会文化論コース

「弱者・マイノリティー論」、「環境文化論」、「ユーラシア文化論」の3つの科目群を置いています。各自の関心・研究領域に即して主となる科目群を選択し、それを中心に履修を進めます。研究テーマは学際的、先鋭的なものなので、本コースと同時に、他のコースからも一定程度履修することによって、多角的な視野と問題意識を育てます。

「履修モデルA」弱者・マイノリティー論科目群

現代社会においてさまざまな事情から「弱者」として位置づけられた人々の立場に立って、民族・階層・ジェンダー等の切り口から現代の社会と文化の諸相を分析し、改革の方向を探ることをめざします。

主要科目：福祉社会論

特長：福祉国家に関する基本的な知識（歴史・制度・思想）を学びながら、「福祉社会」への批判的知性を養っていきます。

科目の目標：「参加」に意義を見いだす福祉社会論（能動的社会を志向する言説）と「排除」に目を向ける福祉社会論（排除型社会を裏付ける言説）が交錯し、衝突を起こす局面とその社会的現実を考察する能力を育てます。

主要科目：民族関係論

特長：近現代における民族と民族関係、さらには「多文化社会論」などについて近年出版された関係書を精読することで、理論的・分析的に考察できる力を育てます。

科目の目標：近現代における民族と民族関係、さらには「多文化社会論」などをめぐって、各人が設定したテーマについての研究報告とそれをめぐる議論によって民族問題を理論的・分析的に考察できる力を身につけます。

主要科目：ジェンダー関係論

特長：ジェンダーないしセクシュアリティに関する理論的・経験的研究の成果を学び、現代におけるジェンダー秩序やそれが引き起こす排除のありようを考察します。

科目の目標：どのような現象がどのような方法で記述され、どのような概念や理論で説明されているのかに着目しながら関連文献を読み、ジェンダー／セクシュアリティ研究の方法を身につけることをめざします。

「履修モデルB」環境文化論科目群

人間の生活圏、たとえば都市あるいは観光や産業の拠点となる地域における自然環境、生活環境、ランドスケープを重視しながら、自然・人文・社会の各科学の視点を総合させて人間社会の環境問題を考えていきます。

主要科目：都市景観論

特長：19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期における、外国人の目からみた日本の都市景観に関する叙述を受講者とともに読み進めながら、近代日本の都市景観に関する検討を行います。

科目の目標：「外」から見た近代日本の都市景観と比較文化的にみた都市景観とその変容を考察します。

主要科目：エコツーリズム論

特長：日本語、英語、中国語（漢語）、朝鮮語の基本文献およびWeb上の文献を読みながら、サステイ

ナブル・ツーリズムとエコツーリズムについて学習し、その中から関心のあるテーマを見つけて各自研究発表を行います。

科目の目標:サステイナブル・ツーリズム (Sustainable Tourism、可持続旅游) およびエコツーリズム (Ecotourism、生態旅游) について学習し、日本のエコツーリズム推進法について理解を深め、日本および近隣諸国・地域のエコツーリズムの事例について理解を深めることをねらいとします。

主要科目：生態文化論

特長：主として Bioregionalism の文献を読みながら、都市社会の生活文化における生物多様性との共生可能な持続可能な社会のありようを考察します。

科目の目標：持続可能な社会を可能にする現代社会の生活文化、特に都市の生活文化における生活圏の生物多様性や、生態系との共生可能な社会のありようを考えるための諸理論と、批判的検討を伴った研究法を身につけます。

「履修モデルC」ユーラシア文化論科目群

多様な世界文化を生みだし、一方でアジアとヨーロッパという二極が文化的、政治的、経済的にせめぎ合い、衝突をくり広げてきたユーラシアの歴史と現在を見つめ直します。

主要科目：南アジアの宗教と文化

特長：スリランカを中心に、グローバリゼーション、ナショナリズム、原理主義、カースト制との関わりの中で、現代南アジアの宗教の変容を考察します。

科目の目標：スリランカを中心に、現代南アジアの宗教変容に関する文献を共に読みながら考察を深めるが、映像資料を活用します。さらにフィールドワークを予定しており、その実施方法、立案や資料作成についても指導します。

主要科目：東西文化交渉史

特長：ユーラシア大陸における東西文化の交渉史を、具体的な物産、人材、思想、宗教等の移動と衝突について考え、同時に「文化史」という学問の成り立ちについても再検討を加えます。博物館等の調査も行います。

科目の目標：東西文化の交渉史の研究を進めながら、「文化史」という学問の成り立ちについても再検討し、今日どのように文化を考えることができるのか、その可能性と限界を考え、それを共有する中で、むしろ固有の学問体系を解体していくことをめざします。